観一39会東京支部活動報告

観一・15回　髙橋俊之

観一39会東京支部は15回卒業が昭和39年だったので、観音寺本部が名付けた観一39会の東京支部として同窓会活動を行っています。

去る６月23日６年間の闘病生活の末永眠された万年幹事の太田氏が倒れる前までは毎年趣向をこらした各種催しを次々と計画され、節目には観音寺本部と京阪神支部との３部合同の一泊旅行をふくめ、隅田川遊覧船旅や豪華レストランでの食事会を行い恒例の毎年の花見の会は事前準備滞りなく実施して参加者は、多い時は会員の半数近くになりおおいに賑わったものでした。

しかし、太田氏が倒れた後は、せめて恒例の花見の会だけでも続けようとして計画した2019年の新宿御苑での花見の会がコロナ禍で中止を余儀なくされた後は、その後続いたコロナ禍による時勢の変化で、同窓会活動は情報交換を兼ねた男性数人程度の会を細々と続けていました。

コロナ禍開けの、昨年の有楽町駅前広場での観音寺フェスタを再活動の起点として、年数回程度の定期同窓会を開催することとなり、年末年始で１回花見の時期に１回、７月頃に１回、起点となった観音寺フェスタに合わせて１回、計４回を基準にしてそれぞれ次回の日程はその時の参加者全員の総意で決めてやることになりました。

開催時間はそれまでの現役で活躍している人を考慮した夜の食事会から、年齢的にも集まりやすい昼間の昼食会に基準を変更して、その上で、昼食会の後は、そのまま帰るのではなく、希望者は近隣の名所旧跡を散策しようと決めました。

また会合場所は過去常連の秋葉原の店がコロナで業態変更したので、分かりやすく起点の有楽町のグルメ街の一画のどこかでやると決め、店決め予約は兵頭氏に一任する事としました。

再活動の手始めとなった昨年の観音寺フェスタの際の同窓会案内は『燧』送付時の総会案内と会費支払い依頼文に追記で記載して、久しぶりの女性陣含む全員への案内となりましたが、結果的には総会出席者も含めて男性だけの集まりとなりました。

女性陣も頑張って電話をかけあってくれたのですが出欠回答の近況欄を見ると、以外にもより元気なはずの女性陣に体調不良で悩んで居る方々が多いのを知ると、私事ながら急逝した妻を思い出して健康の重要性を痛感した次第で、男性陣だけとなった同窓会でも話は健康状態の話で持ちきりでした。どこも問題ない人は少数派で、大半は一病息災ではないが、何かしらの問題を抱えていて、それ故に健康にはそれまで以上に留意して、一生懸命頑張っていたのでした。

年末の忘年会は一応一年の締めくくりとして昨年一年間無事に過せたことと再活動が曲がりなりにも始められた事を祝っての祝杯とし、次の花見の会の開催日は、時期的に満開に間に合わせようと予定を３月27日（水）に決めました。

花見の会は一応３月27日（水）と決めたものの開花予報が段々後にずれ、どうも時期としてまずいとなり、日程を再検討しようとしたが、３月は予定が多く入っていて結局予定通りに行いました。

部屋が個室でしたので気兼ねなく話せ、やはり話題の中心は主に健康面となりました。

同窓会活動が活発であった2007年（平成19年）の豪華フランス料理店モナリザ丸の内店（丸の内ビル36階）での近況報告では健康に過ごす秘訣を語り合いほとんどの人が自慢げに自分の健康法を話していたものですが、その時の還暦すぎから17年後の今回の会合では常連だった人も体調不良で出席出来ない人も多く、出席しても癌の治療中とか過去に大きな手術をしたとか、大半の人が大病の経験者でしたが、皆それなりの最善の努力をして、生活をエンジョイしていました。

一方健康面で問題ない横浜市大名誉教授の永岑氏は数少ない現役研究者で前回参加した時のその後の研究成果の資料を配ってもらいました。そして次回は7月12日（金）と決めました。

花見の会は早過ぎたので、散策地は話題の麻布台ヒルズの展望台で眼下の眺めを堪能して、最後は早咲きの桜を背に記念写真を撮りました。

次回の7月の会は7月12日（金）と決めていましたが永岑氏が前日の7月11日（木）の夕方5時半から御茶ノ水の明治大学創立100周年記念会館で講演をすると云うので6月中旬に日程変更をして同窓会の後の行事は講演に参加することと決め、日程を一日早めました。

日程変更の件が一段落した時に太田氏の訃報が届き、急きょ関係先に訃報案内を出して、女性陣には同時に永岑氏の講演案内もしたところ、永岑氏の小学校からの同級生菅（旧姓永田）祝子さんから講演会に参加したい旨の連絡を受け現地集合での参加となりました。

同窓会の昼食会は時間が3時からとなったので軽食会として、6月に亡くなった太田氏の多彩な趣味をたしなんでいた思い出話で盛り上がりました。

そして後行事の講演会参加は永岑氏の講演議題が時宜を得た『ガザ侵攻に対するホロコースト研究者の視点』で、200人定員の教室だが確実に座れるためには開演30分前までに到着すべく軽食会場を後にしました。

途中御茶ノ水駅近くの流政之の御茶ノ水作品を探索した後、講演会館に向かいました。流政之は石の彫刻家として有名で、香川県とも縁が深く、香川県各地に作品があり、庵治石で有名な高松市郊外の庵治半島にアトリエがあり、『讃岐うどん』の命名者ともされています。

会館で、現地集合の菅さんとも合流し、開演前の慌ただしい時間でしたが、永岑氏と短時間の会合で激励し、永岑氏も祝子さんと30年ぶりの再会を果たし、結局計10人近くが参加の同窓会となりました。次回は観音寺フェスタ開催日です。

講演会は永岑氏ともう一人の講師の2つの報告で構成され、共にガザ侵攻に関する興味深いテーマで両方を包含する公開シンポジウムの題名は『ガザのジェノサイドとリベラリズムの危機』でした。内容もたいへん考えさせられるもので、裏付けの乏しい意見は信用されないもので、すぐ感化されやすい自分の性格を見直すいい機会となりました。

以下、後日永岑氏から送られてきたメールを抜粋して内容の一端をお知らせします。

研究書関係者によりますと、今回の第11回公開シンポは、これまでで最多の参加者だったようです。ガザの目に余る大量殺害・途方もない破壊状況に多くの人が心を痛め関心を持っていることがよくわかりました。立ち見もでて紙レジュメも足りなくなったようで、事務局はうれしい悲鳴を上げていました。おかげさまで、参加者は、112名（出席リスト記名者数）から記名せずに満席状態なのでさったひとなどおよそ20名ほど、あわせて130名ほどの参加だったようです。私はそれなりに準備もして、自分なりに「熱を入れて」臨んだのですが、ナチズムとシオニズムの関係、ナチスの時代からの連続性、思想・運動の共通性など、私の強調したかったこと、イスラエル再考の必要性を多くの参加者にどこまでご理解いただいたのか、適切な話の仕方になっていたか、気にしています。

（参考）配布資料による単語の説明

ナチズム：ドイツ民族主義（民族帝国主義）

シオニズム：ユダヤ民族主義・植民地主義・パレスチナでのシオニスト国家建設（9割の先住民パレスチナ人の土地からパレスチナ人追放）

樋

VOL.49 2024

香川県立観音寺第一高等学校
同窓会 東京支部 http://www.kan1.jp/

HIUCHI

特集

活躍する若手同窓会員